

Psychological Characteristics of Children at Two Years after the Great East Japan Earthquake: Analyses of Telephone Consultation Records

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2020-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂間, 玲子 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2002393

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2147 号

Psychological Characteristics of Children at Two Years after the Great East Japan Earthquake: Analyses of Telephone Consultation Records

東日本大震災 2 年後の小児の心理的特徴：電話相談記録分析

坂間 玲子（さかま れいこ）

博士（医学）

論文審査結果の要旨

本論文は、東日本大震災 2 年後の小児の心理的特徴をアンケート結果と心理士の電話相談から解析した臨床的に意義ある論文である。地震大国と呼ばれる日本の歴史の中で、2011 年の東日本大震災は最大規模の地震と津波を記録した。地震や津波を経験した子どもへの心理的影響は数カ月、あるいは数年持続すると言われているものの、最大規模の震災がどのような心理的影響を子供たちに与えるのかについて記載したものは少ない。本研究は、東北メディカル・メガバンク機構プロジェクトである地域子ども長期健康調査結果を用いた。震災 2 年後の 2013 年に宮城県県南全域に在籍する 12,742 名の小学・中学生の両親・保護者への無記名式のアンケート調査のうち、子供たちの心理的適応を予測する SDQ (Strengths and Difficulties Questionnaire) score > 16 点であり、かつ両親や保護者が心理士の電話相談を希望した 720 名を対象に行った。そのうち社会的サポートを受けていない 230 名の解析の結果、震災 2 年後であっても心因反応を示す子どもや両親がおり、長期的な心理的サポートの必要性が示唆された。個々の震災状況(親類との死別、転居、両親の精神的安定性)については不詳であるが、海岸でより高い心因反応がみられる可能性があり、震災時に心因反応を示している小児に対しての社会的サポートの確立と、長期的なサポートの必要性が示唆された。また、震災との関連は明確ではないものの、154 名(67.0%)の保護者が“育児相談”について悩んでおり、震災時にこれらが顕著に現れる可能性があることから、平時の育児サポートも必要な可能性が示唆された。本研究は、震災後の実態調査を通して小児の心理的特徴を把握したものであり、今後の対策立案に重要な報告である。

よって、本論文は博士（医学）の学位を授与するに値するものと判定した。